NPO法人 長崎史談会

長崎学レポート

第12号
2023年5月1日発行
長崎学レポート
編集委員会
〒850-0861
長崎市江戸町5-8
第5一ノ瀬中央橋ビル

2022年度　第5回公開講座 2022年12月11日 ・ 第6回公開講座 2023年1月28日

第五回長崎学公開講座 第一部発表要旨

長崎の食文化について ～卓袱料理ともてなしの心～

脇山　順子

一、本膳料理とは

日本料理の正式なお膳立てで、現在の日本料理の形式や作法上の基本となる。本膳料理は、武家の礼法を基にして室町時代に始まり、江戸時代にほぼ現在の形になった。

汁と菜の数により一汁三菜・二汁五菜・三汁七菜などがあり、汁の数が膳の数を表し、本膳・二の膳・三の膳、焼き物膳を与の膳という。膳に並ぶ皿数でご馳走かどうかがわかる。

二、卓袱料理のルーツ

寛永一八年(一六四一)オランダ商館が平戸から出島に移転する。出島には最初二人、のちに三人のくずねり(調理人のこと)が雇われていた。

この三人がオランダからもたらされた牛肉、ハム、ボートル(バターのこと)、セロリ、パセリ、チシャ、トマト、パイナップルなどを使った調理法を学び、この三人が日本へオランダ料理を伝えた最初の人といわれる。

承応三年(一六五四)中国から臨済宗黄檗派の禅僧隠元が興福寺の住職として渡来、隠元豆、西瓜、蓮根、茄子、孟宗竹、寒天などの食材を伝えるとともに普茶料理や煎茶をもたらしたとされる。

元禄二年(一六八九)中国人は唐人屋敷に収容されるが、収容されるまでの約六〇年間は市内の民家(町宿)に宿泊していた。

その間、各家庭で中国料理を学ぶ機会を得て、卓袱料理が誕生している。約三五〇年前のことである。

三、卓袱の名称

中国語で卓(しっ)はテーブル、テーブルクロスを袱(ぽく)と呼ぶ。中国では丸いテーブルを卓子(ちょっつう)と呼び、中国料理を食べる膳の形式が基本である。

一方、江戸初期、御朱印船の船主であった荒木宗太郎の妻がベトナム出身で長崎の人たちからアニオーさんと呼ばれ親しまれている。アニオーさんの出身地ベトナムでは卓のことを「シッポク」という方言があったといわれる。

写真提供　史跡料亭花月

卓袱料理

四、卓袱の特徴

卓袱料理は、和食、中華料理、洋食が入り混じった国際色豊かなコース料理で、大きな円卓に多くの料理を並べる長崎の郷土料理でもある。

会席膳のように一人一膳ではなく一つの大きなテーブル「卓袱台」(ちゃぶだい)を四～五人で囲み、皿や大鉢に盛った料理を各自が自分の直箸や湯匙を使い、二枚の小皿に取っていただく。食卓を囲む人たちが「おもやい」(共有・シェアするの意味)で食するため、盛りつけなどの手間が省け、人数に増減があっても対応しや

この会は個人会員と法人会員の皆様により運営されています

長崎バス
文明堂総本店
みろくや
福砂屋
松翁軒
森谷商会
小野原本店
浜屋
メモリード
十八親和銀行

すいし、給仕や後片付けの煩わしさから解放され、合理的、機能的な面が歓迎され、今日に至っている。

五、料亭における卓袱料理のいただき方

①会が始まるまで控えの間で待つ。準備が整うと朱塗りの円卓を四～五人で囲み座る。

②円卓の上には小菜が並べられ、刺身、湯引き、口取り、酢の物、揚げ物、豆の蜜煮など、冷たい料理で構成されている。

③客人が揃って着席すると、直に温かいお鰭（吸い物）が一人ずつに運ばれる。それまでは私語を謹んで静かに料亭の女将（おかっつぁま）の「お鰭をどうぞ」の挨拶の言葉を待つ。この挨拶には客人をもてなす料亭の心意気が示されている。よく聞いて感じ取ることが大事である。

六、卓袱料理は百花繚乱、豪華、多彩、美味

中国、ポルトガル、オランダの人たちの交流により社交性に富み、事実婚もあったりして珍しい食材や調理法を学ぶことができた。また、貿易により富を得た人たちが種々の情報を取り入れ、独創性を発揮し、サプライズ料理に仕上げている。

写真提供　史跡料亭花月

角煮

七、卓袱料理の献立形式

- お鰭（吸い物）椀種は中国の影響で奇数
- 小菜（刺身）最初に箸をつける。
- 小菜（湯引き）鯱や鱧、鱶など
- 小菜（口取り）からすみ、伊達巻など
- 小菜（豆蜜煮）十六寸豆や十八寸豆など
- 小菜（酢の物）鯨づくし
- 小菜（揚げ物）長崎天ぷら、蝦吐司（はとし）など
- 小菜（香の物）漬物など
- 中鉢（豪華）豚の角煮、パスティなど
- 大鉢（温かい料理）卵豆腐、しんじょなど
- ご飯（白飯）赤飯、寿司、茶飯など
- 煮物（スープ仕立て）
- 水菓子（果物）季節の果物など
- 梅椀（汁粉）各自に漆器椀を用いる

八、おわりに

卓袱料理は鰭椀に始まり梅椀に終わる。感謝に始まり感謝に終わるという本膳料理の心が根底に流れている。

「風は態を為す」という言葉があるが、その場に相応しい態度、動作、言葉づかい、肘をつかないなど基本的な礼儀作法は心得ておきたいものである。

最も美味しいと感じる状態で食べるのが、料理をつくってくれた人へのマナーである。卓袱料理を通して自己中心的になりがちな私たちの日常生活を省みたいものである。

二〇一三年一二月三日、「和食」がユネスコの無形文化遺産に登録された。その理由は、海外の食材や料理を上手に取り入れて一つの文化を育んできたということである。長崎の卓袱料理も認められたということになる。

第六回長崎学公開講座 第一部発表要旨

長崎学研究者・福田忠昭と本山家文書調査

藤本健太郎

本公開講座では「長崎学研究者・福田忠昭について」と題し、主に福田の『長崎市史』編修委員としての活動について発表したが、本稿では紙幅の関係上、福田が大正九年（一九二〇）に手がけた、本石灰町で乙名を務めた本山家が所蔵した古文書史料（本山家文書）の調査活動に対象を限定して記述する。

なお、福田自身が記した長崎歴史文化博物館収蔵「編修餘録」（大正九年分）、「回想録」（大正一〇年《一九二一》～大正一五年分）をもとに、福田による本山家文書の調査活動を追跡したい。

大正八年（一九一九）以降、長崎市内における歴史史料の散逸防止を訴え、自ら新聞紙上を通じて企画立案した『長崎市史』編修委員として自治体史の編纂に携わることになった福田は、地誌編の担当として市内の神社仏閣及び旧家を対象とする史料調査事業に従事していた。

その過程において、福田が大正九年一月から翌年四月までの期間、史料調査にあたった訪問先が本山家である。

大正九年一月一七日、福田は当時の本山家当主・本山和雄あてに「貴家と三宝寺との関係」の聞取調査、「貴家御珍蔵文書器具類拝見」を願う書簡を送った。

福田は、一月二〇日に本山家を訪問。同日付の「編修餘録」の記事では本山家文書について「同家文書ハ積ンデ数千、乙名ニ関スル資料トシテハ実ニ稀有ニ属ス、冊子アリ、届アリ、信書アリ、乙名ノ職掌ヨリ、唐蘭貿易ヨリ、人事ニ及ビ、小櫃二杯アリ」と綴られている。

こうして本山家文書と出会った福田であったが、翌二一日、三宝寺で調査にあたっていたところ、本山家から一箱の古記録が送られてきた。そのため福田は同月中を費やして史料整理に勤しむことになった。

所蔵する古文書史料を福田に送付して整理を託するという本山の行動か

らは、福田と本山との間で深い信頼関係が築かれている様子を読み取ることができる。

「編修餘録」によると、以前、福田が小島尋常小学校校長を勤めていた当時、本山が同校の保護者会副会長を務めており、以前から知己の間柄であった。それゆえに本山は、福田に本山家文書の閲覧及び調査を許諾したという。

福田忠昭関連年表

和暦（西暦）	事項
大正元年（1912）	8月、小島尋常小学校校長に就任
大正2年（1913）	10月、『増補訂正幕府時代の長崎』刊行
大正7年（1918）	1月、『振遠隊』刊行
大正8年（1919）	4月、『長崎市史』編修委員に就任 5月、長崎県教育会編『大礼記念長崎県人物伝』刊行
大正10年（1921）	4月、『本山家古文書目録』作成
大正12年（1923）	3月、『長崎市史』地誌編（仏寺部）刊行
昭和4年（1929）	3月、『長崎市史』地誌編（神社教会部）刊行
昭和5年（1930）	病没（52歳）

こうして福田は、本山から預かった史料の目録作成に着手したが、市史編纂業務の多忙も手伝って作業に一年あまりの時間を要した。調査活動の成果が「本山家古文書目録」として一応の完成をみたのは「回想録」によると大正一〇年（一九二一）四月二五日のことであった。

目録は複製とあわせて三冊を製本し、本山家、長崎県立長崎図書館に献本されたという。うち一冊は現在、長崎歴史文化博物館の福田文庫に収蔵されている。

「本山家古文書目録」に採録されている「八二種百弐拾五点」の史料は本山家へ返却されており、その多くが長崎県立長崎図書館寄贈史料として伝来しているが、その後も福田による未整理史料の目録作成が進められる過程で、福田が昭和五年（一九三〇）に死去したこともあって、一部が未返却のまま、昭和五九年（一九八四）に約五〇件が福田文庫として収蔵されている。

その上で大正一〇年（一九二一）以降、本山家文書が東京大学史料編纂所と長崎歴史文化博物館に収蔵されるに至った経緯についても紹介しておきたい。

当時の所蔵者であった本山和雄によって、乙名としての業務に関する簿冊や日記など約五〇件が昭和一二年（一九三七）までの間に長崎県立長崎図書館へ寄贈された。本山による寄贈の背景には、福田による史料調査によって、自邸で保管する本山家文書の研究上の価値を本山が認識していたことが考えられる。

一部資料の散逸を防止したという意味でも、福田の手によって大正一〇年当時の本山家文書の概要把握が行われ「本山家古文書目録」が作成された意義は大きい。

戦後に至って本山家では箪笥など什器の売立が行われ、その際に収納されていた古文書が市場に流れたとされる。そのうち、平成一八年（二〇〇六）には約四五〇件に及ぶ本山家文書が売立に出され、東京大学史料編纂所が購入した。

そして平成二〇年（二〇〇八）現当主によって本山家の旧邸宅で保管されていた史料約九〇〇点が東京大学史料編纂所に寄託されている。

その後、平成三一年（二〇一九）及び令和二年（二〇二〇）に長崎市長崎学研究所が売立されていた史料約六〇点を購入し、現在に至っている。

令和二年四月、長崎と東京で収集が進んだ本山家文書の研究活用を図るため、双方の研究者からなる「長崎市中『本石灰町乙名本山家文書』の研究資源化に向けた調査研究」グループが発足。そのメンバーが中心となって資料調査目録を作成するとともに、本山家文書を用いた調査研究を実施した。

一連の成果については令和五年（二〇二三）三月刊行の長崎市長崎学研究所紀要『長崎学』第七号に掲載されていることから、本稿とあわせて参照されたい。

【引用史料】
「編修餘録」（収蔵番号：テ一九　五七）
「回想録」（収蔵番号：テ一九　六〇）
「本山家古文書目録」（収蔵番号：テ一九　五八）
（いずれも長崎歴史文化博物館収蔵）

第五回長崎学公開講座 第二部発表要旨

花月の建築（二）　花月楼

村田　明久

初期の花月楼は、円山応挙「花月亭之図」*に描かれている。港側の二階建と平屋建が雁行型に並んだ建築で、平屋の前面に小池がある。しかしこの建築は宝暦九年（一七五九）に焼失したといわれる（注1）。

一代山口太左衛門の祖母イチの指示で花月楼が再建された。応挙画と「丸山町絵図」*の配置が似ていることから、当初の建築と庭園を模したようだ。

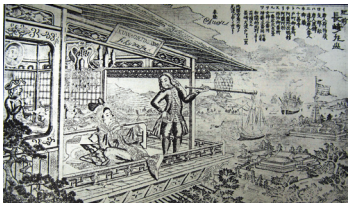
史跡料亭花月には、山口太左衛門の妻ヌイが造らせたという花月楼の建築模型が残る。長年の間に壊れたが、後に修復された。「九分通りは変更されていないらしい」（注2）とあるが、変更された箇所は不詳である。

模型の二階屋は、現在階段もなく間仕切りもな

1　加藤貴行『花月記』私家版二〇一二年　四六二頁
2　古賀十二郎『丸山遊女と唐紅毛人前編』長崎文献社一九九五年一三六頁

い。筆者が模型を実測したところ、四間・四間の方形と判明した。こうした指摘はこれまでの研究にはない。階段を取り付けると二階は田の字に仕切られていたようだ。

銅版画「花月蘭人図」は、オランダ人と遊女が眼下に出島と唐人屋敷を望む透視図法で描かれ、部屋は二間・二間の四部屋の一つとわかる。この構図は北東の二階部屋の位置だが、模型の北東側の造りも、広縁の持ち送りの造りで一致する。



銅版画「岡田春燈斎画 花月蘭人図」*

さらに模型を検討すると、花月楼の客室は、二階屋で、一階に一三畳半、平屋中央に一八畳の二間が続き、一二畳間の前に小池が迫り、客室の背後には板間、部屋、通り庭の土間が設けられている。

*は長崎歴史文化博物館収蔵

第六回長崎学公開講座 第二部発表要旨

神ノ島・伊王島台場の築造

野田　和弘

弘化二年(一八四五)老中阿部正弘は、長崎港警備強化策について福岡、佐賀両藩に諮問した。

福岡藩は、港口での強化を述べたが、第一〇代佐賀藩主鍋島直正は、港外での強化を述べた。

弘化四年(一八四七)直正は、阿部に長崎港警備のためには、港内に異国船を侵入させないことが肝要で、このため港外の要地神ノ島と四郎が島、伊王島に台場を築き、大砲を百門備える必要があるとの意見書を提出した。

しかし幕府は、最終的には従来通りの港口の警備強化策を示した。

嘉永三年(一八五〇)直正は、阿部に神ノ島と伊王島は自藩の領地なので、佐賀藩単独で台場を築き、台場での警備も単独で行いたいと申し出た。

さらに台場築造の費用の一部として、一〇万両の拝借金を願い出た。

幕府は、風水害による凶作のためという名目で五万両を認めた。

工事は、嘉永四年(一八五一)から始まり安政二年(一八五五)に完成した。作業人夫、石工など延べ四〇万人を動員した大工事で、特に神ノ島と四郎が島を結ぶ長堤の工事が難工事であった。全台場築造の総費用は二〇万両程といわれている。

完成後、神ノ島と四郎が島に三七門、伊王島に二六門の大砲が据え付けられた。

安政六年(一八五九)直正は、将軍徳川家定から台場築造を賞され、将軍家伝来の備前長船長光の名刀を賜り、拝借金五万両の返納を免除された。

参考文献　木原溥幸『幕末期佐賀藩の藩政史研究』九州大学出版会一九九七年

神ノ島と四郎が島を結ぶ長堤

法人会員紹介

株式会社十八親和銀行

長崎市銅座町一番一一号

株式会社十八親和銀行本店

十八親和銀行は、明治一〇年(一八七七)長崎市に「第十八国立銀行」として創立された十八銀行と、明治一二年(一八七九)長崎県平戸市に「第九十九国立銀行」として創業し、昭和一四年(一九三九)に設立された親和銀行の合併により令和二年(二〇二〇)一〇月に誕生した。

十八銀行が長崎市内に初めて支店を開設したのは大正三年(一九一四)で、大黒町の北支店と丸尾町の稲佐支店である。当時、新魚市場が開かれたこと、第一次世界大戦の勃発で三菱長崎造船所が活況を呈していたことを理由にこの場所が選ばれた。昭和四四年(一九六九)、旧本店建築から約八〇年が経過し、新本店を建設。これが現在の十八親和銀行の本店となっている。

親和銀行は、昭和一四年(一九三九)に佐世保商業銀行と佐世保銀行の合併により設立した。二代目頭取の北村徳太郎(設立当時、副頭取)は、設立に向け多くの銀行を集めているからこそ和を重んじる精神が大切であるという思いを込め、「親和」と名づけた。建築家白井晟一氏の設計による佐世保本店ビル別館「懐霄館(かいしょうかん)」は、歴史的価値の高い建築物である。

当行のロゴは十八と親和の頭文字JとSからなり、長崎県の県民鳥である二羽のオシドリで構成。コーポレートカラーは長崎県の花である雲仙ツツジの色で、親しみやすさや調和を表している。

当行は「顧客満足度No・1銀行」を目指す姿とし、地域社会の豊かさや持続可能な地域経済の発展に貢献することを目指している。